関連国際学会の報告

第6回ヨーロッパ口腔内科学会

藤 林 孝 司

6th Biannual Congress of the European Association of Oral Medicine

Takashi FUJIBAYASHI

本誌第6巻第2号において第5回ヨーロッパ口腔内科学会の報告をしているが、今回それから2年後に第6回ヨーロッパ口腔内科学会 6th Biannual Congress of the European Association of Oral Medicine がポルトガルのリスボン市にて行われ、それに参加したのでその報告をする。

6th Biannual Congress of the European Association of Oral Medicine (EAOM) は2002年10月3日から5日まで3日間リスボン市のベレン文化センター (Centro Cultural de Belem) を会場として行われた。会長はポルトガル・リスボン大学 Oral Medicine の Antonio Mano Azul 教授であった。参加者は約180名で、参加者の国別ではポルトガル、スペイン、イタリア、イギリス、アイルランド、アイスランド、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、デンマーク、フランス、オランダ、ドイツ、オーストリア、ギリシャ、トルコ、クロアチア、ユーゴスラビア、スロベニア、ラトヴィア、エストニア、などであり、ヨーロッパ以外でもイスラエル、南アフリカ、ブラジル、チリー、アメリカ、カナダ、日本などで、日本人は私を含め獨協医科大学から5人、鹿児島大学から2人の計7名であった。

会議はまず10月3日の初日午後 EAOM 会長のオランダの Isaac van der Waal 教授の開会の挨拶から始まり、ついで組織委員会会長 Antonio Mano Azul 教授の簡単な挨拶があった。Scientific Session のはじめはアイルランドの Stephen Flint 教授が再発性アフタに関して基調講演をおこなった。その後は一般口演になり、難治性口腔潰瘍に対する薬物療法の研究、再発性アフタに対するノルウェーのハーブを用いた治療効果の研究、Candida albicans のバイオフィルムに対する fluconazole の効果、Candida

albicans の遺伝子と菌の毒力の関係、口腔カンジダと外陰部カンジダの関連に関する研究などなかなか日本ではあまり見られない演題内容であった。

30分のコーヒープレイクの間にポスター展示発表と討論も行われた。日本からも鹿児島大学上川先生の Candida の分離の研究と新田先生の ATL の症例報告がポスターであった。16:45より白板症の臨床に関する基調講演があり、演者はイタリアの Giovanni Lodi 教授で、白板症の診断と治療についてよくまとまった講演であった。ついで 17:15 から 19:10 まで白板症、角化症、前癌病変、悪性化などに関する一般口演が9題あり、なかには病理医からみて口腔粘膜から生検標本を採取する際に artifact を避けるにはどんな注意が必要かといった実際的かつ重要な演題もあった。

初日の最後の session として Tropical disease...short review と題するブラジルの Oslei Paes de Almeida 教授の総説講演があった。ブラジルのアマゾンなど赤道下の熱帯地方の感染症をはじめとする特有の口腔粘膜疾患について多くのスライド供覧があった。名前はあっても日本では全く見たこともない病変の提示は私にとっては刺激的であり、またおそらく多くのヨーロッパ人も同様な印象を受けたと思われる。

第1日目の Scientific Session はそれで終了し、その後 social program としてリスボン市の river front の the BLUES CAFÉ に場所をかえて、会長主催の歓迎 cocktail party が催された。EAOM 会長の Isaac van der Waal, General secretary の Crispian Scully, ポルトガルの今回会長の Antonio Mano Azul, 本来なら7月の日本口腔粘膜学会に来るはずであったイギリスの Stephen Challacombe, 古くから旧知のノルウェーの Tony Axell, ベルリンの Peter Reichart, さらにアメリカからの Abraham Reiner や AAOM の本年度会長であった Francina Lozada Nur,

獨協医科大学口腔外科学講座 (主任: 藤林孝司教授)
Department of Oral and Maxillofacial Surgery,
Dokkyo University School of Medicine (Chief: Prof.
T. FUJIBAYASHI)

昨年モンテリオールで AAOM の会長であった Martin Tyler など多くの友人や知人に会うことが出来て心が和む夕べであった。

大会2日目10月4日(金)のプログラムは朝8:30よりイギリス Crispian Scully 教授の Orofacial manifestation of systemic disease と題する基調講演から始まった。ついで9:15から11:00まで一般講演の session では座長はイギリス Crispian Scully, スペイン Pedro Diz, ノルウェー Tony Axell の3名であったが興味ある話題が続いた。イギリス GKT Medical and Dental School の Challacombe の Crohn 病と口腔顔面領域の肉芽腫性病変での血清抗体や免疫反応の研究, イギリス Eastman Dental Institute, Oral Medicine の Hodgson による Crohn 病や肉芽腫性病変へのサリドマイド投与の治療効果, イタリア Turin 大と Parma 大との共同研究による北イタリア地方の口腔粘膜を主体とする多形性紅斑 40 症例での原因事項についての cohort 研究で, 粘膜症状ある群では HSV 感染と有意な関係がみられたが, 薬物とは有意ではなかったなどの発表があった。次いで日本の獨協医大からの発表が6題中4題あり, 武田はシェーグレン症候群における MR-sialography を従来の唾液腺造影撮影と比較しての研究, 後藤はシェーグレン症候群の診断におけるガム試験の研究, 藤林は日本のシェーグレン症候群改訂診断基準の診断精度を USA-EU グループの試案と比較しての研究結果, 渡辺はシェーグレン症候群の病理組織診断におけるリンパ球浸潤の定量的測定法を computer image processor を用いての研究をそれぞれ発表し, 各演題に積極的な質問と回答を含む討論が行われた。あとの2題はユーゴスラビアからシェーグレン症候群における唾液成分に関する研究, イギリスから唾石症 210 例の対する minimal invasive treatment の研究報告などがあった。11:00より30分のコーヒープレイクの後, 13:00までスペインの Mariano Sanz 教授による歯周病の基調講演と歯肉増殖症その他歯肉病変に関する一般講演5題があった。

午後の session は 14:30 から本年 AAOM の会長であった Francina Nozada-Nur が口腔扁平苔癬と HCV および口腔癌, その関連はどのくらいあるのかと題する興味ある総説講演を行った。15:00-17:00 は一般講演で口腔扁平苔癬 (OLP) と HCV の関連に関するもの2題, OLP に対する photodynamic therapy の研究, OLP 患者の神経学的評価と唾液中 cortisol level の研究, OLP に対するステロイド剤の micro-emulsion 療法, OLP に対する tacrolimus の局所療法, びらん型 OLP に対する局所療法として cyclosporin とステロイドの clobetasol の効果についての二重盲検法による試験成績など OLP についての興味ある

演題が続いた。その後, イギリス Joanna Zakrzewska による the evidence based orofacial pain と題する講演があり, 18:00-19:30 は discussion forum として Oral Medicine at pre-graduate level, post-graduate level and as a specialty in Europe と称して会長 Azul 教授の司会で5人のシンポジストによる発表と討論が行われた。イタリアの Antonio Carassi が学生への Oral Medicine 教育を, イギリス Stephen Challacombe が卒後の Oral Medicine のイギリスでの現状を, Pedro Diz がスペインでの現状, ノルウェーの Tony Axell がヨーロッパの専門医としての Oral Medicine とくにスウェーデンでの認定医試験について, オランダの Isaac van der Waal がヨーロッパでの専門医としての Oral Medicine 確立のため今後資格試験が必要となると思われ, そのための EAOM の役割などについて話し, 遅くまで討論が行われた。

大会3日目の10月5日(土)は8:30-9:00にフィンランド Styna Syrjanen による The role of virus in oral mucosal pathology と基調講演があり, 9:00-11:00 は一般講演で HHV-8 感染の研究, HCV 患者 interferon と抗ウイルス薬合併治療における唾液中からのウイルス消失に関する研究, 長期 HIV 陽性者での口腔扁平上皮癌の発生, Burning mouth syndrome に関する研究, orofacial granulomatosis, 天疱瘡などの講演であった。11:15-13:00 には Clinical session 「Iberian Pathology」と称する臨床症例の提示とその診断についての討論のプログラムがあり, このプログラムは EAOM ではいつも伝統的に毎回行われているもので, 私はいつも興味深く聴いているが, 今回は比較的若いポルトガルの doctor が現病歴, 現症, 病態写真, 臨床検査データ, 病理組織写真などを提示し, その診断を聴衆が提示し議論するもので, 進行役にはイギリスの Stephen Porter であった。結果的には erosive lichen planus with papilloma などといった鑑別診断に迷う比較的難症例が3例ほど提示された。

13:00-14:00 は EAOM の総会が行われた。土曜日午後は一般歯科医向けの Oral Medicine の course がポルトガルの local の Portuguese Academy of Oral Medicine が主催しておこなわれたが, 私は参加しなかった。

学会最終行事として 21:00 より参加者全員による Congress Closing Dinner が Lisbon Riverfront の Restaurante-Bar KAIS にて行われ真夜中12時近くまで続いた。2年後の第7回 EAOM はドイツのベルリンにて Peter Reichart 教授を会長として2004年に行われことになり, 再会を約して散会となった。また Eastman Dental Institute, Oral Medicine の Stephen Porter 教授は来年7月第13回日本口腔粘膜学会総会に亀山洋一郎会長の招待

により特別講演のため来日の予定となっており、名古屋での再会を約束して別れた。

2日目の夕方、会場のロビー内で Oral Medicine の国際会議に関して非公式ながら代表者が集まり打ち合わせの会議があり、2001 年カナダのモントリオールで International Federation of Oral Medicine (IFOM) が行われたが、その後も時々国際的な Oral Medicine の会議を開いていく必要があることから、その企画を話し合った。参加者はイギリスの Crispian Scully、アメリカの Abraham Reiner、カナダの Martin Tyler、日本から私のほか、

イスラエルから代表者 1 名であった。その結果、2005 年を目途として、Isaac van der Waal 教授を代表責任者として Crispian Scully 教授が実務を担当し、International Congress of Oral Medicine を企画していくことが合意された。開催地についてはこれからであるが、なるべくならアメリカ、西ヨーロッパに偏らず東ヨーロッパ、南アメリカ、アジアなどでしかも開催費用の安価ところでしかも世界各地から direct flight が可能なところを候補に考えることになった。3年後のことであるが日本始めアジアからも多くの参加が期待されている。